

令和3年度 第27回青年技術交流会報告

四国本部青年技術士交流委員会

副委員長

中根 久幸

NAKANE Hisayuki



1. はじめに

令和3年4月17日に四国本部青年技術交流委員会と高知支部で共催した「第27回青年技術士交流会」について報告いたします。

青年技術士交流委員会とは、平成25年に発足された（公社）日本技術士会四国本部の常設委員会のひとつで、「若手技術士を中心とする技術者ネットワークを構築し、会員相互の能力向上を果たすと共に、技術士としての職能を地域社会に幅広く浸透させ、技術士の地位向上を果たすことを目的とした活動を行う。」を活動方針に掲げ、今年で9年目を迎えます。

発足当時から、コンパクトにまとまった四国地方の利便性を生かし、四国4県を跨いだ交流を活発に行ってまいりました。しかし、令和2年度・3年度は昨今の事情から、WEB会議システムを活用したリモートでの交流会が主流となり、移動を伴う交流が図られていないのが現状です。

このような状況の中、令和3年度のトップバッターとして高知での開催が決定しました。

2. 交流会企画

令和2年度は、香川県は自前で制作した動画を交えた講演会、徳島県はWEB会議システムをフル活用した参加型の講習会が開催され、委員内で、次はどのような手法を取り入れるか、期待が膨らんでおりました。

これまで高知で開催された交流会は、昼間の催しに関わらず、夜の交流会も楽しみにし

てくださる方が多く、実際に夜の部のみにわざわざ徳島から来られた方も居られる程です。

そこで、「高知といえば・・・」をキーワードに、企画を立てることとしました。そうすると、自然に「カツオ」が思い浮かんできました。

高知では、日常の食卓は勿論ですが、県外からのお客様を招いた会食や、少し高価な贈り物など、「カツオ」は非常に身近で、且つ、自慢の特産品であります。その一方、当たり前過ぎて、カツオを取巻く状況は、あまり知られていないと思います。

そこで、従前から夜の交流会では主役であった「カツオ」を、昼の部で取り上げることとしました。

3. カツオの番記者

『カツオ、あなたが知っているのはその味だけですか？—カツオ、カツオ言うたち、おまさんら知っちゅうかよ—』と題して、高知新聞社の八田大輔氏を講師にお迎えし、講演会を開催する運びとなりました。

八田氏は、神奈川県出身でありながら、一本釣り漁船にも実際に乗り込む等、10年間あらゆる角度からカツオを取材されてきたカツオの番記者です。

海洋環境の変化、海洋資源の減少、漁業を取り巻く世界情勢、SDGs、2017年に設立された高知カツオ県民会議等、実は知っているカツオを取巻く現状が隠されておりました。

4. 交流会当日

開催方式は、WEB 会議システムを用いたオンライン方式を基本としましたが、感染症対策を実施した上で、(株)第一コンサルタンツの会議室をお借りして、会場での聴講も可能としました。当日は、WEB 聴講が 15 名、会場聴講が 13 名、合計 28 名の参加となりました。事前準備も十分であり、会場設備に支障もなく、スムーズに講演会を進行することができました。

ここで講演内容について、簡単に紹介させていただきます。前半は「カツオの漁獲と資源」、後半は「カツオを未来へ」と題して、講演が進められました。



写真-1 会場の様子

(1)カツオと高知

高知はカツオの消費量が全国 1 位だそうで、2018 年～2020 年の年平均消費量は、2 位仙台市の 1,928(g/世帯)に 2 倍以上の差をつけて、高知市は 4,108(g/世帯)とのことでした。

しかし、近海カツオ漁船の数は、2021 年調べて宮崎県が 18 隻と最も多く、高知県は 11 隻で全国 2 位であること、一度に多くの漁獲高が期待できる「巻き網漁」を行う漁船が高知県内では操業されていないこと、高知県の一本釣り船での漁獲高は、全国漁獲高の 2 割程度であること等、決して高知はカツオ漁獲高日本一ではないとのことでした。

それでは、なぜ高知に新鮮なカツオが揃うのかと言えば、全国から高知にカツオが集ま

るからだそうで、全国のカツオに価値を付ける県であり、「カツオ売場を乾かしてはいけない」と言われているそうです。

(2)カツオの世界情勢

かつて中西部太平洋のカツオ漁は、日本の一本釣り船が主流でしたが、1980 年代から各国の巻き網船が参入し、カツオ分布の中心といえる熱帯海域で操業している漁船は 270 隻を数えるようです。さらに、船の大型化が進み、日本近海でマグロを狙う船は 135 トン級であるのに対し、千～2 千トン級が主流であるとのことでした。また、フィリピン、インドネシア両国の年間漁獲高は約 40 トンで、日本の 1.7 倍に相当すること、日本近海では漁獲対象とならず、流通もしない体長 30cm 以下の小型魚が大半を占めているとのことでした。

ところで、このような小さいカツオ、10cm 程度のカツオ節となり日本に輸入され、粉末化した後に汁や調味料の原材料になっているようです。

(3)高知カツオ県民会議

「高知県の県魚であり、地域を代表する食素材であるカツオを、地域の誇りとして将来にわたり維持していけるよう、高知に、そして日本にカツオを取り戻す目的で、「高知カツオ県民会議」を立ち上げる」(高知カツオ県民会議 HP より)を目的に、2017 年に設立された有志団体です。研究者や行政主導の「日本カツオ学会」と異なり、企業経営者らがけん引する点が特徴のひとつのことでした。

5. おわりに

WEB 会議システムとの併用の他、特に新しい仕組みを取入れるには至りませんでした。高知を訪れたような、高知のことを知っていただけるような内容をとの思い付きから始まりましたが、最後には国際的な海洋資源の現状を知る絶好の機会となりました。また、身近なことでも、国際的な潮流の中で変化していることを改めて実感することとなりました。